

中学校社会科における学習意欲の向上について

学籍番号 209211
氏名 田代 陸
主指導教員 柿 慶子

第1章 研究の背景と授業実践について

通常学級の中には発達や家庭状況等に課題があり学習に困難を抱える生徒が一定の割合で存在している。(文部科学省 2012)また、「障害のある生徒と障害のない生徒が、できるだけ同じ場で共に学」び、「それぞれの生徒が、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごすことが大切である(文部科学省 2012)とされている。全ての生徒が参加できるユニバーサルデザインを取り入れた社会科授業について村田(2019)は「学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての生徒が、楽しく『社会的な見方・考え方』を働かせながら問題解決できるように、工夫・配慮された通常学級における社会科授業のデザイン」が必要だと述べている。

2年間の学校実習を通して、実習校の生徒の授業での様子を観察した結果、様々な要因から、学習意欲が高くないと推察される生徒も一部見られた。本研究では学習意欲の低い生徒を含めた全ての生徒に対してどのように授業内容・方法を工夫すれば、授業における学習意欲を向上させることができるのかについて検討していくことを目的とする。

第2章 基本学校実習Ⅰ・Ⅱでの取り組み

基本学校実習Ⅰ・Ⅱでは主に社会科の授業における生徒の学習活動の様子を観察した。学習意欲が高くないと思われる生徒を詳しく観察してみると、小学校からの学習の積み上げの問題や少しのつまずきで学習意欲を失う等の要因があることが分かった。併せて、特別な支援が必要な生徒について実習校の特別支援教育コーディネーターから話を伺うことで、様々な援助ニーズを抱えた生徒の困り感を理解し、個別の支援を行うことができた。

さらに主体的・対話的で深い学びをテーマにした授業も行った。授業では、筆者(授業者)と生徒の対話、生徒同士の意見の交流の双方が十分ではなかった。要因としては授業の最初に学習内容やめあてを提示しなかったため、生徒が学習の見通しを持てなかったことや、学習意欲が高くない生徒が「この学習なら自分にもできる」と思えるスモールステップの要素がなかったこと、意見交流を活発にする手立てなどが不十分だったことが挙げられる。

第3章 実践研究Ⅰ：教員へのインタビュー調査

「学習意欲の向上」をテーマにしたインタビュー調査では5人の教員から実習校で授業を行う上で注意していることや、工夫していることについての話を伺った。実習校では援助

を必要とする生徒が多いことから、「個別のアセスメントに基づいた支援」「スモールステップの導入による成功体験」「集中時間の短縮化」など生徒の実態に応じた授業の工夫に関する概念を得ることができた。

第4章 実践研究Ⅱ：質問紙調査①「社会科好き嫌いについて」

生徒を対象にした質問紙調査では、「社会科の授業が好きか嫌いか」、またその理由を答えてもらった。分析の結果、暗記を嫌う意見や、教員の人柄に好印象を持っている意見など、生徒の考えを知ることができた。筆者が行う授業においては、暗記に頼らないために、発表や意見交流などの主体的な活動を通して、語句の内容を理解するような活動を取り入れようと考えた。

第5章 実践研究Ⅲ：社会科の授業実践

生徒の観察とインタビュー調査、質問紙調査の分析を活かして、生徒の学習意欲向上を目指した授業実践を2クラス×2回行った。授業実践には調査などから得た様々な工夫を盛り込んだ。その結果、生徒は意見を Google フォームに積極的に書き込む様子等が見られた。

第6章 実践研究：質問紙調査② 授業アンケート

授業実践の前後に授業アンケートを行うことでその効果を検証した。15の質問項目中、「社会科で話し合いやグループワークのある授業は楽しい」「社会科で意見を書くときに根拠・理由などをもって書いている」「社会科の授業において『これならできそうだ』と思う学習内容だと取り組む意欲が湧く」等、8つの項目に肯定的な回答の割合が増えて、授業実践で行った工夫の効果を確認することができた。

第7章 総合考察

本研究では、学習指導要領の改訂を背景に、教員へのインタビューと生徒へのアンケート調査から、学習意欲の向上に関する工夫を抽出して、2回の授業実践を行った。2回の授業実践の前後に行った授業アンケートでは15項目中8項目において肯定的な回答の割合が増えて、工夫の効果を確認することができた。また、学習指導要領の改訂に伴い、生徒が主体的に思考する時間や生徒の意見を共有する時間を意図的に授業実践に組み入れたが、生徒が活発に意見を表現する姿からその方向性が正しいということも実感できた。

一方で課題として、①平素からのメディアリテラシー教育の必要性 ②PDCA サイクルを何度も回しながら実践すべきであること ③公民的分野だけでなく地理的分野や歴史的分野でも実践し検証すべきであること、の3点が挙げられる。

今回授業実践をして強く感じたのは、このような授業の工夫は単発の授業とするものではなく、年間を通して継続して行っていくことが重要であり、またそのためには生徒の状態をアセスメントすることが不可欠であるということである。今後教員として、本研究で得たことを糧に授業実践を行っていきたい。